



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	初級日本語クラスにおけるオンライン及びハイフレックス型授業実践 : 実用日本語クラスでの実践から
Author(s)	黄, 美花; HUANG, Meihua; 長谷川, 洋枝 他
Citation	日本語・国際教育研究紀要, 25, 25-44
Issue Date	2022-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/85360
Type	departmental bulletin paper
File Information	25_2.pdf



初級日本語クラスにおけるオンライン及びハイフレックス型授業実践

－ 実用日本語クラスでの実践から －

黄美花・長谷川洋枝・屋方淳子・山本さやか

初級日本語クラスにおけるオンライン及びハイフレックス型授業実践 — 実用日本語クラスでの実践から —

黄美花・長谷川洋枝・屋方淳子・山本さやか

要 旨

本稿は、初級レベルの実用日本語クラスにおけるオンライン及びハイフレックス型授業の実践報告である。2020年5月から2021年8月まで続けてきたオンライン及びハイフレックス型授業の実践を振り返り、そこから得られた知見を今後の授業改善へつなげることを目的とする。

まず、実用日本語クラスでのオンライン及びハイフレックス型授業の実施方法を簡単に紹介する。次に、実践を通して共有されたオンライン及びハイフレックス型授業の利点と問題点について整理し、更に、学生側と教員側からの授業評価についても述べる。最後に、今後の課題を検討し、非対面授業に向けての提言を行う。

授業実践を振り返ることで、オンライン及びハイフレックス型授業は授業参加者全員の協働で、また、教員の工夫次第で、学習効果を維持しつつ学習者の満足度の高い授業運営が可能であるという知見が得られた。

〔キーワード〕 初級日本語、実用日本語、オンライン授業、ハイフレックス型授業

1. はじめに

学習者の日本語力に限りがある初級クラスでは、教員は学習者へのより細かい目配りと声かけを意識し、また言語以外のうなずきや目線など非言語コミュニケーションも駆使して授業を行っている。そのためオンライン授業に切り替えとなった際、初級日本語授業を担当する教員は教室と同じような授業実践が可能なのかについて、不安を抱えながら授業に臨むことになった。実用日本語クラス担当の教員も、それぞれの場で孤軍奮闘しながら、初めてのオンライン授業を実施した。1年間試行錯誤した結果を教員同士で共有したところ、ICTツールを活用したオンラインならではの

教室活動、学習者同士のつながりの持たせ方など、教室での教授経験からは得られなかった新しい学びを得たことが明らかになり、今後改善すべき点も含めてこれらの知見は今後の初級レベルの日本語授業実施の参考になると考えた。したがって本稿は実用日本語の担当教員間で共有されたオンライン及びハイフレックス型授業の利点、問題点と工夫を整理し、今後の初級レベルの日本語オンライン授業に還元することを目的としている。

2. 授業の概要

2020年より開講された実用日本語は、北海道大学一般日本語コースに含まれる科目であり、課外補講として日本語科目を履修する大学院生、研究生、研究員などに加え、I S P (Integrated Japanese Science Program) の学部生がともに学ぶクラスである。実用日本語 1 (基礎)、実用日本語 1 (運用)、実用日本語 2、実用日本語 3 の 4 科目があるが、いずれも初級レベルの科目である。受講希望者は、オンライン申請時にプレースメントテストを受け、その成績によって各クラスに配置される。

実用日本語は、日常生活の身近な場面で使う文法・語彙を習得し、聞く・話す・読む・書くことができるように、使えるようになることを目標としている。具体的に説明すると、実用日本語 1 (基礎) と実用日本語 1 (運用) はゼロレベルから学べるクラスである。実用日本語 1 (基礎) では、教科書『できる日本語』(初級第 1 課から第 9 課まで) を使用し、日本語の基礎的な文法、語彙を習得する。実用日本語 1 (運用) では、実用日本語 1 (基礎) で学んだ文法、語彙を使い、日常生活の場面で使える会話の練習や簡単な文を書いて発表するなどの活動を行う。実用日本語 2 では、教科書『できる日本語』(初級第 10 課から第 15 課まで) を使用し、実用日本語 3 では、教科書『できる日本語』(初中級第 1 課から第 9 課まで) を使用する。実用日本語 2 と実用日本語 3 では、基礎的な文法、語彙の学習と運用を一つのクラス内で完結する方式で授業を組み立てている。

2020年度は、実用日本語全科目においてオンライン形式で授業を行った。2021年前期は、対面授業の希望者がいた実用日本語 1 (基礎) と実用日本語 3 の科目は対面授業とオンライン授業を同時進行するハイフレックス型授業で行い、実用日本語 1 (運用) と実用日本語 2 は、対面希望者が授業をキャンセルしたため、オンライン授業のみ実施した。以下表 1 は、各科目の受講者数である。

表1 2020年度—2021年度前期実用日本語受講者数（単位：名）

科目	授業形式	2020年度 前期	2020年度 後期	2021年度 前期	合計
実用日本語1 (基礎)	対面	—	—	2	2
	オンライン	2	9	3	14
実用日本語1 (運用)	対面	—	—	0	0
	オンライン	1	5	2	8
実用日本語2	対面	—	—	0	0
	オンライン	8	6	8	22
実用日本語3	対面	—	—	2	2
	オンライン	0	9	1	10
合計		11	29	18	58

オンライン授業では、授業ツールとしてZoomとGoogle Classroomを用いた。Zoomを使用して同期型（リアルタイムの）オンライン授業を行い、Google Classroomを利用して資料配布、課題提出等のやりとりを行った。ハイフレックス型授業では、指定された教室で対面授業を行うと同時に、Zoomを通してオンライン上の学生にも同時に授業を配信する方法で進行了。資料配布、課題提出等に関しては、対面授業では学生と直接、オンラインの学生とはGoogle Classroomを通じてやりとりをする方法で進めた。

ハイフレックス型授業では、教員側カメラで教員が授業を行っている様子を映すほか、教室の学生側にもカメラを設置し、対面授業に出席している学生の様子をZoomに映した。オンライン上の学生は教室の雰囲気画面越しに感じ取れるよう、また、対面の学生はオンライン上の学生も含め一緒に授業を作っていく一体感が持てるよう、相乗効果を狙った。図1は、ハイフレックス型授業の教室でPC等機器を設置後の一例である。

教員によっては、スピーカー、マイク等の機器を使うパターンもあり、機器の設置は日本語コースで配置されたTAが担当した。



図1 ハイフレックス型授業の教室の一例

3. 実用日本語クラスでの実践

3.1 オンライン授業の利点

以下では、実際のオンライン授業での利点を実践例などとともに述べていくこととする。

3.1.1 ブレイクアウトルームの活用

コロナ禍で同期型（リアルタイムの）オンライン授業を行うにあたり、学生たちのペアワークはZoomの機能の一つであるブレイクアウトルームを活用した。

対面授業では、学生たちは友達とかたまって座る傾向が高く、また、毎回の授業で同じ席に座ることが多かった。そのため、ペアワークでは、どうしても友達同士または毎回同じ人と行うことが多かった。しかし昨年5月からオンライン授業を行うこととなり、授業形態が変わってしまった。それに伴い、学生同士のペアワークでも、Zoomのブレイクアウトルームを使用することとなった。前述したが、ブレイクアウトルームは教員がグループ設定を行うことができるため、ペアワークのたびに、学生のペアを変えることができる。しかし、短所として、1度の授業で何度もグループ設定を変えることができるため、その都度変えることは、教員には少し負

担が増すという点が挙げられる。一方で、学生たちには色々なクラスメートとペアになることによって、ペアワーク以外に色々な話をする事ができるため、対面授業のときよりも、横のつながりが強くなったという利点が見られた。筆者が、それぞれのブレイクアウトルームを見てまわると、練習を終え、時間が余っているときなど、雑談などしている様子が見られた。

このように学生たち同士の横のつながりが強くなったことによって、オンライン授業であっても一人で勉強しているわけではないという連帯感のようなものが得られたと考えられる。

3.1.2 画面共有の活用

次の利点として挙げるのは、画面共有の活用だ。

ここから、実践例を紹介していく。初級日本語クラスの学生は、知っている語彙数が、どうしても少ない。筆者の授業では、PowerPointを用いているのだが、新出語彙は、毎回、イラストを提示している。しかし授業を進める中で、学生たちには分からない語彙が出てくる。そのようなとき、常にネットにつながっているオンライン授業では、それを検索し、その写真なりイラストを画面共有して、学生に提示することができる。

またスピーチの授業でも、この画面共有機能が役立った。例えば、「自分の国の料理」というテーマでスピーチを行ったときのことだ。学生たちは、それぞれ自分の国の料理について、材料や作り方を説明するという授業内容だったのだが、これまでの対面授業では、説明だけで終わっていたのが実情だ。しかし、オンライン授業になってからは、説明後に学生が、その料理の写真を画面共有して提示し、さらには、周りの学生から他にどんな料理があるかという質問や他の学生の国にはない材料についても画面共有機能を用いて写真を提示し質問に答えることができた。

3.1.3 日本人へのインタビュー

次に日本人へのインタビュー活動で見られた利点について述べていく。

まず、対面授業のインタビュー活動の簡単な概要を説明する。インタビューを行う時期としては、ゼロレベルからスタートし、動詞・形容詞・名詞の過去形や、存在動詞、授受表現、動詞のテ形及び辞書形などを学習し、簡単な質問であれば日本語で可能になった段階である学期の最後に行

われる。学生たちは、それまで勉強した既習文型を用いて、いくつかの質問を作成し、日本人へのインタビューを行う。インタビュー活動には90分1コマの授業を全部で3コマ分当てている。初めの90分授業では、学生を2～3人のグループに分ける。次に、グループごとに日本人大学生のアルバイト事情や、就職活動といったテーマで5つぐらいの質問を決めさせる。次の90分授業で、質問内容を教員がチェックしたあと、グループ内でインタビューの練習を行い、その後は他のグループとインタビューの練習を行う。そして最後の90分授業で、学内の学生食堂へ行き、日本人学生へのインタビューを実施することになっている。

コロナにより、日本へ入国出来ていない学生が殆どであったため、代案としてZoomのブレイクアウトルームを使って日本人へのインタビューを行った。オンライン授業でも対面授業のときと同様、学期の最後の段階で行い、インタビュー活動には3コマ分の時間を当てた。インタビューの方法だが、ブレイクアウトルームを使用し、学生2人、日本人2～3人が一組となり、それぞれブレイクアウトルームに配置した。そして、各グループに7～8分の時間を与え、インタビューを実施させた。教員がブレイクアウトルームの時間設定をしているため、時間になると全員がメインセッションに一度戻ってくる。その後、教員が学生のペアは変えず日本人だけ変え、またブレイクアウトルームに配置するというを繰り返し行い、参加してもらったすべての日本人にインタビューをさせるという方法を用いた。

対面授業のインタビュー活動と異なる点は、まずインタビューの相手が日本人大学生だけではなく、あらゆる年代へのインタビューとなった点だ。それにともない質問の内容も大学生生活というテーマではなく、日本の文化など様々なテーマで質問することになった。次に、対面授業だったときのインタビューでは、グループによって回答者数に、ばらつきがあったのだが、オンラインインタビューでは日本人参加者全員にインタビューを行うため、回答者数のばらつきがなくなった点が挙げられる。またインタビューがすべて終わり、時間が余った場合、普段教員以外と日本語で話さない学生たちがあらゆる年代の日本人と話をする機会が得られるようになったという点も挙げられる。しかし、時間制限を設けているため、回答が長くなり、時間内にすべての質問ができなかったという欠点も見られた。

インタビュー活動後、学生たちに感想を聞いたが、全員が最初は不安だっ

たが、実際に教員以外の人と話ができ、本当に楽しかったと話していた。

3.1.4 日本国外からの受講

最後の利点として、オンライン授業になったことにより、学生が日本国外からでも受講が可能になったという点が挙げられる。北海道大学の構成員は在籍中、大学E L M S（北大独自の教育学習支援システム：Education and Learning Management System）I Dが与えられる。このI Dがあれば、Google ClassroomなどのL M Sを利用することが可能になり、学外や日本国外からでも受講できるようになる。以下表2は2020年度1学期から2021年度1学期の実用日本語の受講生の居住地をまとめたものだ。

表2 実用日本語受講生の居住地

	実用日本語1 (基礎)	実用日本語1 (運用)	実用日本語2	実用日本語3	合計
日本国内	7	3	11	7	28 (48%)
日本国外	9 ¹⁾	5	11 ²⁾	5	30 (52%)

表2から分かるように、受講生のうち、約半数が日本国外から受講していたのである。

また、学期途中、来日が可能になった学生もいた。この学生たちは来日後、2週間東京での隔離生活を経て、札幌へ来ることができた。この2週間の隔離生活の中でも、インターネットの設備が整っている環境であれば受講が可能であった。実際、筆者が担当した学生の中には、日本へ来る飛行機の搭乗時間前が授業の時間と重なり、搭乗時間直前まで空港で授業に参加していた者もいた。

このように、オンライン授業になったことにより、札幌以外の日本国内はもちろん、国外からも受講可能になったという点は、学生たちにとっても利点となったと考えられる。

3.2 オンライン授業の問題点と工夫点

以下では、オンライン授業での問題点と、その問題点に対する工夫点を実践例と共に述べていく。

3.2.1 ネットワーク環境

同期型でオンライン授業を行うにあたり、一部の学生はネットワーク環境に問題があった。ネットワーク環境のよくない学生の状況を以下に挙げる。

学生によっては、始業時間に間に合わない、授業の途中でインターネットが切れてしまう、授業に入れない、といったことがあった。授業の途中でインターネットが切れるのは、カメラをオフからオンにしたとき、ブレイクアウトルームへの移動の操作を行ったとき、発言し始めたときなどが多かった。また、日本人へのインタビューなどでいつもより多くの人数（学生+複数の日本人）がオンライン授業に入ったときにインターネットが切れてしまった学生もいた。教員も画面共有をしていると、学生のインターネットが切れたことに気づきにくく、その学生が再度クラスに入ってきたときや、声が聞こえないことで初めて気づいたということがあった。

工夫点として、オンデマンド対応の学生や欠席の学生がいなくても、毎回授業を録画した。授業が始まると同時に録画し、クラウドに保存、授業の後、Google ClassroomでURLを共有した。そのことにより、学生は各自、授業に出られなかった部分の録画を見ることができた。他の学生も授業で理解できなかった部分の録画を見て復習することができた。インターネットに問題のない学生の中には、後で録画を見て、再度自分のペースで復習できるのでいい、という意見もあった。教員も授業の途中でインターネットが切れてしまった学生にあわてて対応したり、他の学生を待たせたりせずに済んだ。

しかし、録画の対応には、問題点もある。録画を見ることは、文法項目の導入などインプットが中心の授業の補助には有効であるが、言語運用などアウトプットが中心の授業では、あまり効果が期待できないと思われる。今後、時差の関係でオンデマンド対応となる学生がいた場合、アウトプットの授業に関しては、授業の録画以外の方法で対応する必要がある。これは今後の課題である。

3.2.2 カメラ

次の問題点として挙げるのは、カメラをオフにして顔を出さない学生が多いことである。ネットワーク環境が悪くカメラをオンにすると切れてしまうという学生や、プライベートな空間で受講する学生の中にはヴァー

チャル背景などが用意できない学生がいるなど、配慮が必要な場合もあるが、それとは関係なく顔を出したくないと考える学生もいる。

この問題点の工夫として、コースの初日、シラバスやスケジュールを説明する折に、できるだけカメラをオンにするという方針を示した。最初に授業の方針として示すことで、大半の学生の協力が得られた。また、ネットワークとは関係なくカメラをオフにしている学生には、最低限自分が発言するときはカメラをオンにするよう働きかけた。

3.2.3 スペルチェック

初級レベルでは、ひらがなやカタカナなど文字一つ一つを正しく覚え、語彙を正しいスペルで書くことが重要である。対面授業では、学生に問題の答えなどをホワイトボードやノートに書かせ、教員は常に学生の手書きの文字をチェックすることができた。文字の間違いやスペルなどをチェックすることは初級レベルの重要なポイントである。しかし、オンライン授業では常に文字の間違いやスペルチェックをすることができない。この点が問題点である。

工夫点として、課ごとの文法クイズや語彙クイズ、宿題などを学生が手書きで書き、自分で写真に撮って、メールで送らせるという方法をとった。この方法は、問題の答えの正解不正解を見るだけでなく、スペルの間違い、また文字そのものもチェックできる。対面授業に比べて回数は減るが、実際に長音・濁音・拗音の間違いや鏡文字、ひらがなとカタカナの混用などもチェックできた。

3.2.4 板書

次の問題点として、板書について述べる。対面授業では基本的にホワイトボードに板書していたが、オンライン授業ではPowerPointなどの画面を共有するという形になった。そこで問題となったのは、学生からの質問など、対面授業ではその場で教員がホワイトボードに書いて説明していたことが、オンラインでPowerPointを共有している状態では難しいということである。

工夫点として、ICT (Information and Communication Technology) 機器を活用することが挙げられる。例えば、Zoomのホワイトボード機能である。ここでは教室のホワイトボードと同じように画面に文字や絵を書く

ことができる。会話や文字では伝わりにくいことを簡単な絵や図を書いて説明することもでき、有効である。しかし、パソコンの場合、マウスを使って絵や図を書くのは難しく時間もかかる。一方、タブレット型端末でZoomのホワイトボード機能を使う場合、タブレット型端末には専用のペンがあるので、マウスより細かい絵や図を書くことができる。タブレット型端末では、学生が写真を撮って送信してきた手書きの作文などを教員も手書きで添削して返却することもできる。

これらを使用しない場合、2台のパソコンを使って、1台は教員（もしくはPowerPointの共有画面）を映し、もう1台は教室のホワイトボードを映すという方法もある。いずれにしても、対面授業で行っていた板書をオンライン授業でもできるようにするには、教員がICT機器の操作に慣れること、問題が起きたときに対処できることが重要である。

3.2.5 授業のペース

授業のペースに関して問題点を挙げる。オンライン授業が原因であるとは明確に言えないが、オンライン授業に変わってから授業のスピードについてこれない学生が見受けられるようになった。原因として考えられるのは、学生の言語環境の面と、デバイスの面である。言語環境の面では、国外から授業を受けている学生の中には、周りで日本語を聞く機会も話す機会もないためか、日本語を学ぶモチベーションが低下している学生が見受けられた。学生からも「授業のときしか日本語を使わないので忘れてしまう」という悩みを聞いた。日本にいる学生もあまり状況は変わらないようで、「毎日オンライン授業なので友だちができない」と言っていた。また、デバイスの面では、日によってパソコンではなくスマートフォンやタブレット型端末で授業を受ける学生もいて、その場でファイルを受け取ることが難しかったり、文字入力の手続きに時間を取られてしまったりすることがあった。

工夫点として、配付資料を事前にGoogle Classroomにアップするようにした。学生は事前に自分のペースで予習ができるため、授業が予定通り進むようになった。文法導入の時間がスムーズに進むことで、アウトプットの時間も確保できるようになった。また、少しでも生の日本語に触れさせるため、オンラインで日本人にインタビューをする機会を作ったり、写真や動画などを使い、日本の様子を話題にしたりするなどした。

3.3 ハイフレックス型授業の問題点と工夫

ハイフレックス型授業はコロナの状況により、1か月ほどでオンライン授業に移行したため、実施期間としては短かった。その中で、機材に関する問題と、対面・オンラインという2グループの学生がいることで生じる問題が挙げられた。

まず機材に関しての問題を挙げる。機材をいくつかつなぐためPCに負荷がかかりZoomが落ちてしまったり、教室内のカメラとホワイトボードの切り替えに戸惑ったりするなど、初めの数回は時間のロスがあり、予定通りに授業をこなせなかった。

次に対面・オンラインという2グループの学生がいることで生じる問題を挙げる。ハイフレックス型の授業では、対面の学生とオンラインの学生を同時に見なければいけないため、何か作業をさせたりすると、どちらかの学生を待たせてしまう、また、教室にいる学生とオンライン上の学生とのペア練習ができないという問題があった。

これらの問題に対応すべく以下の3点を工夫した。

まず1点目は、使用する機材をなるべく少なくし、PCの負担を軽くすること、また操作を単純にすることを心がけた。2点目は対面の学生にはホワイトボードに、オンラインの学生には画面上に同時にそれぞれ指示を出し、学生の待ち時間をなくすよう配慮した。3点目として対面の学生とオンラインの学生の授業中のペア練習ができない代わりに、全体での質問タイム、発言タイムを増やし、クラス全体の雰囲気全員が把握できるようにした。

今回のハイフレックス型授業は実施期間が短かったため、十分な実践を行うことができなかつたのが実情である。

4. 授業評価

4.1 学生側の評価—授業アンケートから

3章の授業実践を踏まえて、4章では授業評価について取り上げる。まず、授業アンケートの結果から、学生側の授業評価について記述する。ここでいう授業アンケートとは、一般日本語コースで年に2回、前期と後期の授業最終日に行う個々の科目の授業アンケートである。2021年8月に行った授業アンケートより、以下の選択式の設問2問と自由記述式の2問について検討する。選択式の設問2問は、「満足度」と「目標達成度」に

着目して抽出した。設問は、アンケート原文通り日本語と英語をそのまま記す。

選択式設問 1 (満足度) 授業は全体として満足できるものであった。

The class was overall satisfactory.

- 5 強くそう思う
- 4 そう思う
- 3 どちらとも言えない
- 3 そうは思わない
- 1 強くそう思わない

選択式設問 2 (目標達成度) シラバスに記載されている到達目標は、()程度達成できた。The objective on the syllabus was achieved () percent.

- A 100%
- B 80%
- C 60%
- D 40%
- E 20%

ここで、2021年前期の実用日本語の受講者18名のうち、アンケート当日欠席した2名を除き、授業アンケートを提出した16名の回答を持って、結果を示す。図2は、選択式設問1(満足度)の結果である。

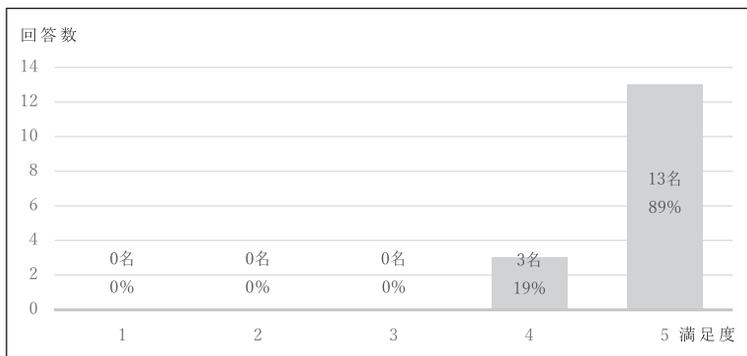


図2 選択式設問1(満足度)の結果

図2の結果でわかるように、選択式設問1の「授業は全体として満足できるものであった」について、アンケート回答者16名のうち13名は評価5

の「強く思う」を、残りの3名は評価4の「そう思う」を選択した。ここから回答結果に差があるものの、回答者16名は授業について基本的に満足していると解釈できる。

図3は、選択式設問2(目標到達度)の結果である。

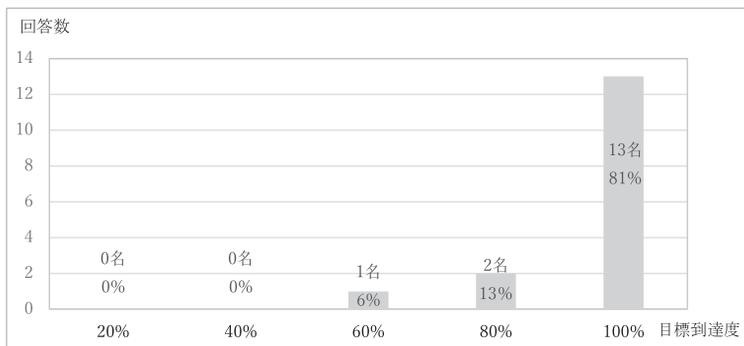


図3 選択式設問2(目標到達度)の結果

図3の結果でわかるように、選択式設問2の「シラバスに記載されている到達目標は、()程度達成できた」について、アンケート回答者16名のうち13名は100%を、2名は80%を、1名は60%を選択した。図2と図3からは同じく回答者16名のうち13名、すなわち全体の8割を超える回答者が授業について満足し、目標も100%達成できたと一致する結果が見られる。回答者の主観的な考えは排除できないが、オンライン授業の満足度、目標到達度が共に8割を超え、今後のオンライン授業の継続に期待が持てる結果だと考えられる。

次に、以下の自由記述2問のうち、オンライン授業と関連する回答のみを取り上げる。以下にアンケート原文の日本語と英語を示す。

自由記述1 この授業でよかったと思う点について書いてください。

Describe any good points of the class.

自由記述2 この授業で改善したほうが良いと思う点について書いてください。Describe any improvement points for the class.

自由記述1の「この授業でよかったと思う点」について、オンライン授業と関連する回答は1件のみだった。

学生回答(原文) : I enjoyed talking to classmates in break-out room.

(訳³⁾ : クラスメートとブレイクアウトルームで話すのが楽しみだった。)

自由記述2の「この授業で改善したほうが良いと思う点」についても、

オンライン授業と関連する回答は1件のみだった。

学生回答(原文) : I would love to be face to face.

(訳 : 対面授業に参加したい。)

自由記述に関しては、オンライン授業に特化した回答を求めたわけではないため、オンライン授業形式についての回答が少なかったと思われる。また、2020年春から1年以上に渡ってオンライン授業に出ている学生においては、多かれ少なかれ現在の授業形式に慣れてきて、取り立ててコメントを書く必要性を感じていない可能性もある。しかし、上記の自由記述2にあるように、対面授業を希望する学生がいる事実も念頭に置きつつ日々の授業に臨む必要がある。

4.2 教員側からの気づきと考察

ここでは3章で述べた実践について、授業実施後の教員側からの振り返りをもとに「教育的効果」と「つながりを意識した授業」の2点から考察する。

4.2.1 教育的効果

オンラインによる実践は初級日本語クラスにおいてどのような教育的効果をもたらしたのだろうか。以下は教育的効果に関する、実用日本語担当教員からのコメントである。

- ① 文法事項などのハンドアウトを事前にGoogle Classroomにアップロードすることで、学生は自分のペースで勉強することができているようだ。事前に文法学習ができていると、授業ではアウトプットを中心に進めることができる。
- ② 授業の録画動画を共有したことで、学生は復習ができ、学習効果が上がった。
- ③ テキストの問題など、答えのスペルチェックを細かく見てあげられなかった。
- ④ 初級レベルでは学生が知っている語彙数が少ないため、知らない語彙が出てきたとき、チャットや画面共有ですぐに写真や文字情報を送ることができて便利だった。
- ⑤ ブレイクアウトルームでは発話の量が増えてよいが、(教員の目が行き届かないため)間違いがそのままになる可能性がある。

①、②はオンライン授業が開始されてから行った試みである。学生にとっては学習のしやすさ、学習効果向上の点で利点があり、教員もそれらを実感している。教員にとっては手間がかかる作業ではあるが、学習効果が得られることから、今後、対面授業が開始された後も活用できう方法と言えるだろう。

③に関して、教室では教員が机間巡視をしながら表記のチェックを行うことができるが、オンライン上では教室と同じように行うことは難しい。しかし初級段階において教員による表記指導は欠かせない。3.2.3に書かれているように、今回はメールで教員に送られた学生からの答案に教員が書き込みをして返送する方法をとることで、教員による最低限の表記チェックの担保が可能となった。しかし教員の立場としては、これだけで充分なのかという葛藤を抱えながらの実践となったことは否めない。今後、初級レベルのオンライン授業における表記指導については、他の授業を担当した教員と情報共有し、より良い方法を模索していく必要があるだろう。

④について、実践内容の詳細は3.1.2で述べられている。Zoomの共有機能を活用することは、話し手にとっては説明する際の日本語力を補い、聞き手にとっては理解の助けとなった。これらの情報を用いることは視覚的な楽しさがあり、初級レベルの日本語クラスにおいては話題の広がりにもつながる。対面授業と異なり、学生同士、クラス全体でのコミュニケーションが取りづらい状況で「もっと話したい」「伝えたい」と言う学生の気持ちを引き出す効果が得られ、教員側としても初級の授業に臨場感と広がりを持たせることが可能になったと考えられる。

ブレイクアウトルームでの活動については⑤のように言語指導の面から問題点も指摘された。教室内では、教員は全体の進行を見回りながら指導に当たるため、その都度個々の誤用を指摘し、修正することが可能だが、オンライン上のブレイクアウトルームで同じように行うことは困難である。この場合、学生同士の交流という点に重きを置き、多少の文法や表現の間違いいには目をつぶるという考え方もあるが、一つの解決方法として、ブレイクアウトルーム活動の後に各グループでどのような会話をしたのかを発表させ、全員で確認する時間を持つことなどが考えられよう。

4.2.2 つながりを意識した授業

オンライン授業への切り替えによる教室内のインターアクションの減少を補うために教員は、学生の発話機会を増やし、クラスのメンバーがつながりを感じられる授業を実施することに意識を向けていた。つながりを意識した授業のキーワードとして、教員のコメントを以下「ブレイクアウトルーム」、「カメラの使用」、「ハイフレックス型授業における受講状況が異なる学生への対応」に分け、考察していきたい。

1) ブレイクアウトルーム

【ブレイクアウトルームについてのコメント】

- ① グループ作業を取り入れることで学生同士のやりとり、交流が増え、学生からも「楽しい」との声があがった。
- ② 全体ではあまり質問しない学生もブレイクアウトルームでは質問するので、人数が少ない方が声を出しやすいようだ。
- ③ 学生たちが自由に交流する場にもなっている。大学院生はお互いの研究について情報交換したり、来日できていない学生は北大に既に来ている学生に札幌の情報を聞いたりしている。

対面授業の際は授業中の活動だけでなく、授業の前後に行われる交流や情報交換の場も学生同士のつながりを作る機会となる。一方、オンライン授業ではそのような機会がほとんどない。そのため3.1.1で前述したように、ブレイクアウトルームが学生同士のつながりを作る場となった。①～③の教員のコメントからも、ブレイクアウトルームを初級クラスで積極的に取り入れたことは、学生の発話機会を増やすだけでなく学生同士の交流の場、情報交換の場としても有益だったことがわかる。

2) カメラの使用

【カメラの使用についてのコメント】

- ① (Zoomの)カメラがオフの学生は影が薄くうっかり指名するのを忘れてしまう。他の学生からも忘れられやすいので教員が多めに声がけするようにした。
- ② カメラがオンにできない学生は表情が見えないため、理解しているのかいないのかわかりにくい。反対にカメラがオンの学生は声に出さなくても、うなずいたりすることでわかりやすい。

- ③ 最初はカメラを頑なにオフにして参加している学生がいたが、ある時からオンにして参加し始めたところ、他の学生と仲良くなりクラス全体のまとまりができた。

上記のコメントから明らかになったのは、学生がカメラをオンにして参加することが、教員の指導のしやすさ、クラスとしてのまとまりに影響したことである。学生のカメラがオフの場合、声は聞こえても、表情、視線、うなずきなどの非言語コミュニケーションが伝わらず、教員側からは学生の理解度を図りにくい。また学生同士のやりとりにおいても、相手の顔が見えないままで話し合ったり会話練習をしたりすることに不安を感じる学生がいることは想像に難くない。可能な限り、教員から声掛けをしてカメラをオンにして参加を促すことが学生間のつながりを作る上でも効果的であると言える。

3) ハイフレックス型授業における受講状況が異なる学生への対応

【ハイフレックス授業についてのコメント】

- ① 教室にいる学生は助け合ったり、ジェスチャーで伝えあったりできたが、オンラインで参加している学生は一人の力で頑張らざるを得ない場面があった。このギャップをどうすべきか。
- ② 目の前の（教室にいる）学生に集中してしまうため、どうしてもオンライン上の学生に注意が向かなくなってしまう。

ここで「受講状況が異なる」ということは、学生が授業を受けている場が教室とオンライン上の2種類あることを指す。コメントの①と②に共通するのは、オンライン上の学生への対応が十分でないことについての教員のジレンマである。ハイフレックス型授業の利点は、教室とオンライン上の学生を一同に集めて授業を実施できることだが、同時に教員は教室内とオンライン上の学生双方に配慮をしながら授業をするという困難さがある。また教員はオンラインであっても対面であっても学生が次の目標に進めるよう学習を設計し、フレキシブルな学びの道筋を用意することが期待される（中島2021）。この点がハイフレックス型授業の難しさでもあり、教員の腕の見せ所と言えるだろう。具体的には、指示の出し方については、教室、オンラインそれぞれの学生への対応を工夫する。双方への目配りに

関しても、とにかく教員が場数を踏んで慣れるなどの解決方法が考えられよう。また②のオンライン上の学生への目配りとして教員ができることは、画面越しの意識的な声掛け、ジェスチャーを使って表情豊かな意思疎通を心掛けるなどの工夫で、オンライン上の学生が疎外感を感じることなく参加できるような気配りをするのであろう。

今回は感染症の状況により、数回ハイフレックス型授業を行った後にオンライン授業に切り替わったため、当該授業の担当教員は機材の活用を含め、3.3で述べたように十分な経験を積むことはできなかった。今後、感染症などの社会変化や多様な学生の受け入れがあった際、再度ハイフレックス型授業を行う可能性も考えられる。他教育機関での実践例も含めて知見を集め、より高度な実践ができるよう備えておく必要があるのではないだろうか。

5. おわりに

2020年5月の開講当初から2021年9月現在まで、実用日本語クラスは対面のみでの授業は行えず、オンライン授業或いはハイフレックス型授業を続けてきた。来日できず国で授業に参加せざるを得ない外国人留学生在が全受講者の半数を超える中、空間を超えたつながりができたのは、オンラインのおかげだと言えるだろう。その例を挙げると、学期開始時に国外からオンライン授業に出ていたが、学期途中に来日した留学生からは、「日本に来る前は孤独を感じていましたが、オンライン授業に出てクラスの一員であると実感しました。札幌にいる学生から、北大の様子や冬を過ごすために持って行くといいもの、コンビニの利用法など授業中に教えてもらったのがよかったです」と授業の最終日にクラスメートにお礼を言っていた。これは学習面でのつながりだけでなく、日本留学に関する情報を交換する場として、あるいは精神面での支えの場としてもオンライン授業の存在がプラスになったと捉えられる事例である。

教員は今回の実践を通じてZoomやGoogle ClassroomなどのICTツールの活用スキルを身につけた。さらに対面とは異なるオンライン上でのクラス内のコミュニケーションについて試行錯誤しつつ、より良い方法を模索した。今後、対面授業に移行した際、オンライン及びハイフレックス型授業を通じて得られたこれらの知見を教員が各々の場で活かしていくことが可能である。たとえばGoogle Classroomの資料配布、回収機能、クラス

コミュニティへの情報周知機能の活用はより効率的な授業運営や、学習効果向上への寄与が期待される。また事情により教室で授業が受けられない学生と教室の学生を繋ぐハイフレックス型の授業は、今後も柔軟に取り入れることができれば、多くの学生の受講を可能にするだろう。

今回はオンライン及びハイフレックス型授業の実施について、学生自身から具体的な意見を聞き取ることができなかった。今後学生自身からも具体的な意見やアイデアを聞き、今回課題となったことを改善しつつさらに質の高い実践を行っていきたいと考える。

注：

- 1) この9名中1名が学期途中で日本へ入国
- 2) この11名中2名が学期途中で日本へ入国
- 3) 日本語訳文は筆者によるものである。以下同様である。

参考文献：

- 中島英博（2021）「新たな教育方法の導入と先導者の役割」『名古屋高等教育研究』第21号 pp.89-97
- 平田未季（2021）「2020年度日本語科目オンライン化の経緯とその課題」『日本語・国際教育研究紀要』24, pp.5-28
- 北海道大学高等教育推進機構国際教育研究部（2021）「実用日本語コース概要」『日本語授業概要2021』 pp.62-69

ふあん めいふあ（高等教育推進機構国際教育研究部非常勤講師）

はせがわ ひろえ（高等教育推進機構国際教育研究部非常勤講師）

やかた じゅんこ（高等教育推進機構国際教育研究部非常勤講師）

やまもと さやか（高等教育推進機構国際教育研究部非常勤講師）

Practice Reports for Online and Hybrid-Flexible type Lessons in the Introductory Japanese Classes: For Survival Japanese Classes Learners

HUANG, Meihua, HASEGAWA, Hiroe,
YAKATA, Junko, and YAMAMOTO, Sayaka

This paper is a practice report of online and hybrid-flexible teaching in elementary level survival Japanese classes. The purpose of this paper is to review the online and hybrid-flexible class practices that we have conducted between May 2020 to August 2021, and to connect the findings to future class improvements.

Firstly, we introduce how we conducted online and hybrid-flexible teaching in elementary level survival Japanese classes. Secondly, we analyse both advantages and disadvantages of hybrid-flexible teaching through our practice, also describing the class evaluations from both students and instructors. Finally, we examined future tasks and made some suggestions for conducting a remote class.

In this paper, we have reviewed our classes practices and found that online and high-flexible teaching can be managed with high learner satisfaction while maintaining learning effectiveness through the cooperation of the entire class and the teacher's ingenuity.